群馬県における呼吸機能検査に関する実態調査

◎澤田 裕也[1)]、齋藤 藍[1)]、岡田 顕也[1)]、市野 智子[1)]、中嶋 清美[1)]、木村 孝穂[1)]
国立大学法人 群馬大学医学部附属病院[1)]

【はじめに】呼吸機能検査項目の多くは、その評価に予測値に対する実測値の割合が用いられるが、予測値を算出する予測式にはバリエーションがあり、採用状況は各施設様々である。また、肺活量(VC)・努力肺活量(FVC)における結果の妥当性・再現性並びに採択基準が記載されている呼吸機能検査ガイドラインが、2021 年に呼吸機能検査ハンドブックとして改訂された。加えて、臨地実習ガイドラインの改訂により、2022 年入学者の臨地実習より必ず実施させる行為の中に肺機能検査(スパイロメトリー)が含まれており、その対応が喫緊の課題となっている。今回、県内の状況を把握し共有することを目的としてアンケート調査を行った。【対象・方法】2023 年 10 月～12 月に、群馬県内の地域医療支援病院を中心とした計 16 施設に Web アンケートを送付した。質問内容は①VC ・ FVC の予測式及び結果の妥当性・再現性並びに採択基準、②臨地実習における学生対応、を中心に作成し回答結果をまとめた。【結果】VC ・ FVC の予測式は、日本呼吸器学会肺生理専門委員会 2001(JRS2001)が 9 施設、Baldwin/Berglund が 7 施設であった。JRS2001 を採用している施設では呼吸機能検査ガイドラインまたは呼吸機能検査ハンドブックを用いている施設がほぼ同数であった。一方で、Baldwin/Berglund の予測式を採用している全施設が、呼吸機能検査ハンドブックを用いていた。また、臨地実習の受入れ施設において、学生に実施させることを検討している施設は 8 施設(約 57%)であった。【考察】障害認定等の法律では JRS2001 の使用が提示されているが、Baldwin/Berglund の予測式を使用している施設が多く、予測式変更について苦慮している状況が伺えた。妥当性・再現性並びに採択基準に関して、日本臨床検査技師会主催の精度管理調査では呼吸機能検査ハンドブックに基づく解答が求められているが、臨床では運用されていない現状があった。測定装置内のチェック機構が呼吸機能検査ハンドブックに非対応であることの影響も大きい。臨地実習では、必ず実施させる対応が求められており、各施設がその対応に苦慮していることも明らかとなった。
【結語】本調査をはじめ、各施設の状況を共有することで、呼吸機能検査が抱える課題の解決に繋げていきたい。